

イネ縞葉枯病が増加しています

近年、栃木県内では県中南部を中心にイネ縞葉枯病が急増し、著しい減収ほ場も見られます。同病を媒介するヒメトビウンカの保毒虫率も急上昇していることから、今後被害の拡大が懸念されるので、適切な防除を行いましょ。

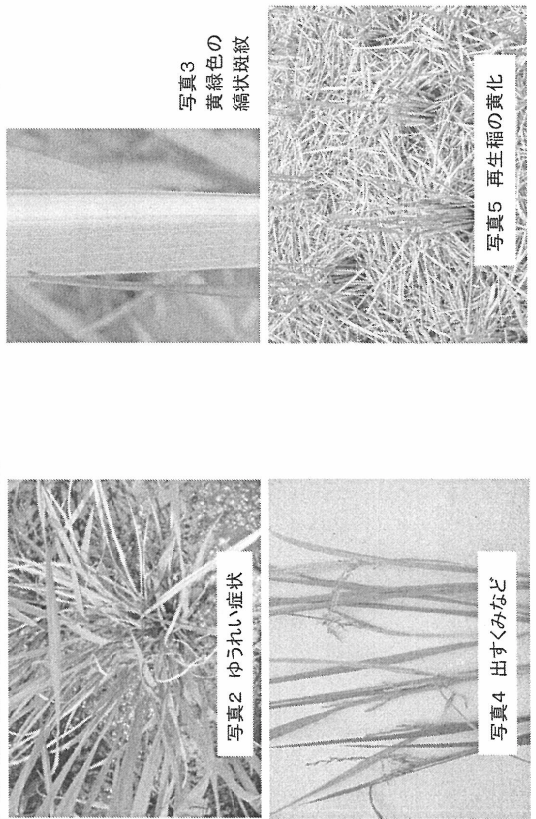
縞葉枯病の発生と病徴

- 縞葉枯病はヒメトビウンカ(写真1)が媒介するウイルス病です。
- 病原ウイルスはヒメトビウンカの卵を通じて幼虫に伝染します(経卵伝染)。
- ヒメトビウンカは、畦畔や休閑田などのイネ科雑草などで越冬し、麦類ほ場で増殖、その後本田に飛来し、稲を吸汁することで本病を媒介します(図)。
- 本病に感染した稲は、分げつ最盛期までは感受性が高く、感染株は多くが枯死します。幼穂形成期以降に感染した株では、穂の出すくみや不稔等が見られます(表1)。

表1 縞葉枯病の感染時期、発病時期、病徴

	感染時期	発病時期	病徴
前期発病	分げつ初期	分げつ最盛期	芯葉が黄白化しわん曲する、ゆうれい症状(写真2)
後期発病	分げつ最盛期	節間伸長期	黄緑～黄白色の縞状斑紋、黄化(写真3)
再生稲	幼穂形成期以降	出穂期以降	穂の出すくみ、奇形、不稔、葉しよう褐変(写真4)
	作付け全期間		再生稲の黄化、徒長(写真5)

※感染時期や発病時期は、稲の作型や生育、気象条件、ヒメトビウンカの発生消長などにより変わります。



防除対策 ～地域ぐるみで防除しましょう～

[1] 抵抗性品種を作付けする

- 抵抗性品種(とちぎの星・あさひの夢)を作付けする。
- 近年増加している飼料イネも抵抗性品種(たちすがた・クサホナミ)はまさり等に切り替える(表2)。

表2 主要品種の縞葉枯病抵抗性

用途	抵抗性品種(強)	罹病性品種(弱)
主食用	とちぎの星 あさひの夢	コンヒカリ なすひかり
飼料イネ	たちすがた クサホナミ	モミロマン リーフスター たちすずか

[2] ヒメトビウンカの防除を徹底する

- 再生稲は縞葉枯ウイルスの伝染源やヒメトビウンカの生息地となるため、収穫後はすみやかに、また丁寧に耕起する。
- 縞葉枯病の発生が多い県中南部では罹病性、抵抗性品種を問わず、ヒメトビウンカに効果のある箱施用剤を使用する。県北部では罹病性品種を作付けする場合に使用する。
- 県内ではプリンズ粒剤等(殺虫成分フィプロニル)に対する薬剤感受性が低下したヒメトビウンカが確認されている。同剤はヒメトビウンカ防除の効果が劣るので使用しない。
- 縞葉枯病の発生が多い県中南部では、箱施用剤とあわせて早植で6月上～中旬、普通植で7月上～中旬に本田防除を行う。なお、本田防除剤は箱施用剤と同一薬剤・系統を避ける。

※縞葉枯病の発生状況や防除薬剤については、農業環境指導センター「植物防疫ニュース」で、随時情報発信しています(URL: <http://www.jpnpa.ne.jp/to-shigi/index.html>)。

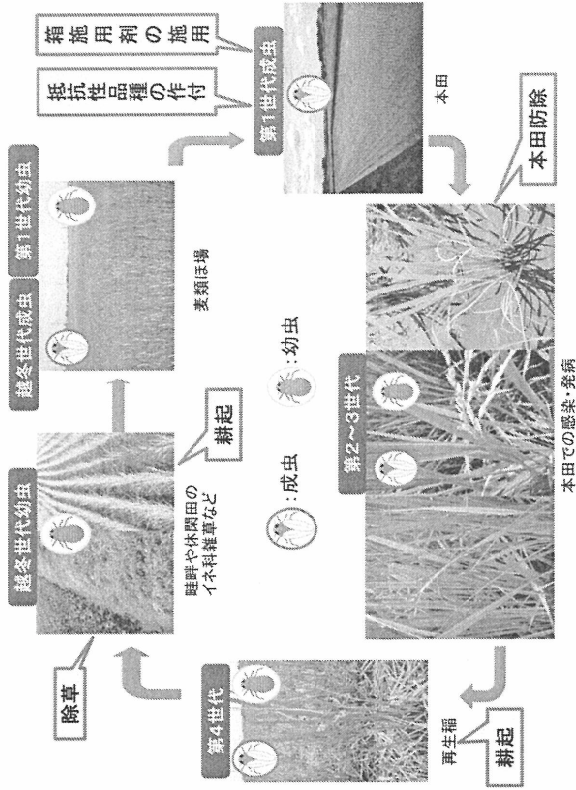


図 ヒメトビウンカの生活環と防除対策

●本資料に関する問合せ先: 栃木県農業環境指導センター

TEL: 028-626-3086 FAX: 028-626-3012